

配偶者との死別後の生活への適応 ～性別からみた生活への自信と役割の関係～

福武まゆみ* 島村美砂子* 難波峰子** 荻野哲也*

要旨 この研究では配偶者との死別後の生活への自信に影響する要因を男女別に明らかにし、自信を高めるための具体的な準備に対する示唆を得ることを目的とした。A 県の老人クラブの会員 600 名に、基本属性、健康状態、日常生活の役割状況、精神的頼り状況、人間関係、配偶者の死後の生活への自信で構成された自記式質問紙を配布した。回収数は 401 名で、役割状況と配偶者の死後の生活への自信の全項目が欠損したものを除く 334 名を分析対象とし、生活への自信の有無と他の項目について、男女別に χ^2 検定を実施した。配偶者の死後の生活への自信と関連する項目は、男女ともに健康状態、精神的頼り状況、友人との付き合いで、男性のみで、近所との付き合い、女性のみで印鑑・通帳管理であった。生活への自信を得る為には、健康状態を維持し、夫婦で普段の役割状況を認識し、これらを生前から実践しておくことや人間関係を構築していくことが必要であるとの示唆を得た。

キーワード：性別、高齢者、配偶者、生活への自信、役割

I. 緒言

老年期は、健康喪失、人間関係の喪失、役割立場の喪失など他の年代に比して喪失体験が多い。特に配偶者の喪失は女性では、65 歳未満 2.7% に対し、65 歳以上では 39.9% と急激に増加している¹⁾。また、高齢者を取り巻く家族構成も、夫婦のみの世帯が 30.7%²⁾ と最も多くなっていることを考えると、配偶者を喪失後単独世帯となる可能性は高く、生活の変化に対する適応が求められる。竹中は、老年期になっての配偶者の死は、悲哀という精神的な面だけでなく、生活を直撃する³⁾ と述べ、高齢者における配偶者の死後の生活への適応には、精神的なサポートのみならず生活面を含めたサポートの必要性を指摘している。また、配偶者を喪失してからのサポートにとどまらず、老後の準備として、配偶者を喪失する前から死に備えて準備をする必要性の指摘⁴⁾や、死に関しても準備をすることで適応していく学習であることも示されており⁵⁾、高齢者においても死に備えての準備は必要であり、とくに生活面における準備の重要性が高いと言える。

配偶者の死に備えての準備における研究では、配

偶者の死に備えての準備が進まない要因として、具体的な準備が明らかになっていないことがあげられている⁶⁾。また、生活面における具体的な準備の一つとして、配偶者の担っていた事柄を明らかにする必要性が指摘されており⁷⁾、現在の生活役割状況を知ることが具体的準備につながると考えられる。夫婦における役割状況として、我が国においては、「夫は仕事、妻は家庭」という固定的な性別役割分業観が維持されており、性別役割分業意識が高いとされている⁸⁾。また、女性は、母親役割意識を強く内面化し、自発的に性別役割分業を受け入れている傾向がある⁹⁾ とも言われており、生活の中における性別による役割状況に違いがあることが推察される。つまり、性別による役割状況に違いがあるとするならば、配偶者を喪失後の生活が困難になることが推察される。配偶者の死後の生活への適応がスムーズにできる為には、配偶者を喪失後も自分自身が生活していけるとの思いを持つこと、すなわち生活への自信を持つことも重要であると考えられる。

そこで、本研究では、配偶者の死後の生活への適応として、性別による配偶者の死後の生活への自信

* 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科保健福祉科学専攻

** 関西福祉大学保健福祉学部看護学科

〒719-1197 岡山県総社市窪木111

〒678-0255 兵庫県赤穂市新田380-3

に影響する要因を明らかにし、男女それぞれの、配偶者を喪失後において生活への自信を持つために具体的な準備への示唆を得ることとした。

II. 用語の定義

本研究では、用語を以下のように定義した。

1. 配偶者の死後の生活への自信とは、配偶者を喪失した後に、自分自身が生活していけると感じた主観的な思いとする。
2. 役割状況とは、日常生活の中で、夫婦の中で分担されている家庭内の仕事や家庭内で担っている事柄とする。

III. 研究方法

1. 調査期間

平成 25 年 10 月～平成 26 年 1 月に実施した。

2. 対象者

A 県の老人クラブに所属する会員 600 名とした。対象者の選定にあたっては、老人クラブ連合会の東西南北の各ブロック長に、自記式質問紙に回答できる人を条件に、それぞれ 150 部ずつ質問紙の配布を依頼した。調査対象者の選定は各ブロック長に一任した。A 県は、地方の都市に位置し、A 県の老人クラブは、4 ブロックに分かれて活動している。

3. 調査方法

選定された 600 名の会員へ依頼文書とともに自記式質問紙を配布した。回収方法は、質問紙への記入後各自で郵送してもらい、返信をもって同意が得られたこととした。

4. 調査内容

調査項目は、基本属性（年齢、性別、家族構成、配偶者との関係）、自身の健康状態、日常生活における役割状況、配偶者への精神的頼り状況、人間関係、配偶者が亡くなったことを想定しての生活への自信で構成した。

1) 健康状態

健康状態については、「よくない」「どちらかといえばよくない」「どちらかといえばよい」「よい」の 4 件法で尋ねた。

2) 日常生活における役割状況

調査項目の選定については、IADL 尺度と福武の質的調査^{6,7)}によって抽出された項目を参考に項目を選定した。

食事の準備、掃除、洗濯、印鑑・通帳管理、家の

修理・修繕、物事的意思決定について「頼っていない」「どちらかといえば頼っていない」「どちらかといえば頼っている」「頼っている」の 4 件法で尋ねた。

3) 配偶者への精神的頼り状況

「配偶者に精神的にどのくらい頼っていますか」の項目について、「頼っていない」「どちらかといえば頼っていない」「どちらかといえば頼っている」「頼っている」の 4 件法で尋ねた。

4) 人間関係

「私は、近所（友人）との付き合いがある方だ」の項目について「そうではない」「どちらかといえばそうではない」「どちらかといえばそうである」「そうである」の 4 件法で尋ねた。

5) 配偶者の死後を想定しての生活への自信

配偶者の死後を想定しての生活への自信（以後生活への自信とする）については、「将来、配偶者がお亡くなりになった後、一人で生活することになった時、生活していく自信がありますか」の項目に対して、「自信がない」「どちらかといえば自信がない」「どちらかといえば自信がある」「自信がある」の 4 件法で尋ねた。

5. 分析方法

基礎統計を確認し、各項目を 2 群に分け、生活への自信と年齢、家族構成、健康状態、役割状況、精神的頼り状況、人間関係について χ^2 検定を実施した。回答肢は、4 件法で尋ねたが、これは、2 件法で尋ねた場合、無回答の割合が多くなることを避ける為である。なお、有意確率は、pearson の有意確率 5% 未満を有意水準とし、期待度数が 10 未満の項目については、Fisher の正確有意確率（両側）5% 未満を有意水準とした。分析には、IBM SPSS 21.0 for windows を使用した。

1) 各項目の 2 群の分類方法

(1) 基本属性

年齢は、前期高齢者（65 歳～74 歳）と後期高齢者（75 歳以上）の 2 群とした。家族構成については、一人暮らし・夫婦のみと 2 世帯以上（2 世帯・3 世帯・その他）の 2 群とした。

(2) 健康状態

「よくない」「どちらかといえばよくない」をよくない群、「どちらかといえばよい」「よい」をよい群の 2 群に分けた。

(3) 役割状況・精神的頼り状況

食事の準備、掃除、洗濯、印鑑・通帳管理、家の

修理・修繕、物事的意思決定、精神的頼り状況について、「とても頼っている」「どちらかと言えば頼っている」を頼っている群、「どちらかと言えば頼っていない」「頼っていない」を頼っていない群の2群に分けた。

(4) 友人・近所との人間関係

「そうではない」「どちらかといえばそうでない」をない群、「どちらかといえばそうである」「そうである」をある群の2群とした。

(5) 生活への自信

「自信がない」「どちらかといえば自信がない」を自信がない群、「どちらかといえば自信がある」「自信がある」を自信がある群の2群とした。

6. 倫理的配慮

老人クラブ連合会長に研究の趣旨、研究方法と倫理的配慮について説明したのち、調査協力の承諾を

得た。その後、老人クラブ連合会長からブロック長に、同内容を記載した説明文書と調査用紙とともに配布してもらった。その時、調査協力の参加は強制ではなく自由意思であることや調査目的・倫理的配慮について説明後配布してもらうよう依頼し、各個人に配布してもらった。研究への同意は、返信をもって研究に同意したこととした。なお本研究は、川崎医療短期大学の倫理委員会（平成25年5月13日）において承認を得た。

IV. 研究結果

1. 対象の属性（表1）

回収数は401名（回収率66.8%）であった。そのうち、役割状況と生活への自信におけるすべての項目に欠損があるものは除外し、334名（有効回答率55.7%）を分析対象とした。対象者の属性は表1に

表1 対象者の基本的属性

		全体		男性 155人(46.4%)		女性 162人(48.5%)	
		平均±SD (範囲) 歳		平均±SD (範囲) 歳		平均±SD (範囲) 歳	
		74.9±5.2	65-95	75.4±4.8	65-87	74.4±5.5	65-95
		人	%	人	%	人	%
年齢	前期高齢者	149	44.6	64	41.3	85	25.5
	後期高齢者	168	50.3	91	58.7	77	47.5
	無回答	17	5.1	0	0.0	0	0.0
家族構成	一人暮らし	38	11.4	6	3.9	31	19.1
	夫婦のみ	163	48.8	92	59.4	70	43.2
	2世帯	56	16.8	26	16.8	29	17.9
	3世帯	42	12.6	20	12.9	22	13.6
	その他	19	5.7	11	7.1	8	4.9
	無回答	16	4.8	0	0.0	2	1.2
配偶関係	死別	53	15.9	9	5.8	43	26.5
	離別	2	0.6	0	0.0	2	1.2
	別居	4	1.2	2	1.3	2	1.2
	同居	258	77.2	142	91.6	113	69.8
	無回答	17	5.1	2	1.3	2	1.2
健康状態	よくない	54	16.2	24	15.5	30	18.5
	よい	265	79.3	130	83.9	131	80.9
	無回答	15	4.5	1	0.6	1	0.6
生活への自信	なし	115	34.4	55	35.5	55	34.0
	あり	219	65.6	100	64.5	107	66.0

※ 性別の無回答17人(5.1%)

n=334

※ 構成比は少数点以下第2位を四捨五入した。

示す。

全体での平均年齢は 74.9 (SD ± 5.2) 歳であり、前期高齢者は 149 名 (44.6%)、後期高齢者は 168 名 (50.3%) であった。家族構成は、一人暮らし 38 名 (11.4%)、夫婦のみは 163 名 (48.8%)、2 世帯以上 (2 世帯、3 世帯とその他) は 117 名 (35.0%) であった。生活への自信は、219 名 (65.6%) が「自信がある」「どちらかといえば自信がある」と回答していた。

2. 性別にみた生活への自信と役割の関係 (表 2)

生活への自信の有無と年齢、家族構成、健康状態、役割状況、精神的頼り状況、人間関係について、男女別に χ^2 検定を実施した結果を表 2 に示す。

1) 男性における生活への自信の割合の違い

基本属性における生活への自信の割合は、年齢及び家族構成では違いはなかった。健康状態において、生活への自信がある人の割合が高かったのは、健康状態がよい人 ($p<0.01$) であった。役割状況で

は、生活への自信の割合に違いはなかった。精神的頼り状況において、生活への自信がない人は精神面で頼っている人の割合が高かった ($p<0.05$)。人間関係では、生活への自信がある人は、近所との付き合いがある ($p<0.01$)、友人との付き合いがある ($p<0.05$) 人の割合が高かった。

2) 女性における生活への自信の割合の違い

基本属性における生活への自信の割合は、年齢及び家族構成では違いはなかった。生活への自信がある人の割合が高かったのは、健康状態がよい人 ($p<0.01$)、印鑑・通帳管理で頼っていない人 ($p<0.01$)、友人との付き合いがある人 ($p<0.05$) であった。精神的頼り状況においては、生活への自信がない人は精神面で頼っている人の割合が高かった ($p<0.05$)。

表 2 配偶者の死後の生活への自信との関係

項目		男性				女性			
		人 (%)		n	χ^2	有意確率	人 (%)		n
		生活への自信なし	生活への自信あり				生活への自信なし	生活への自信あり	
		55(35.5)	100(64.5)				55(34.0)	107(66.0)	
年齢									
前期高齢者		27(49.1)	37(37.0)	155	2.14	n.s	28(51.9)	57(53.3)	161
後期高齢者		28(50.9)	63(63.0)				26(48.1)	50(46.7)	0.029
家族構成									
一人暮らし/夫婦		33(60.0)	65(65.0)	155	0.382	n.s	35(64.8)	66(62.3)	160
2世帯以上		22(40.0)	35(35.0)				19(35.2)	40(37.7)	0.1
健康状態									
よくない		17(31.5)	7(7.0)	154	15.975	**	17(31.5)	13(12.1)	161
よい		37(68.5)	93(93.0)				37(68.5)	94(87.9)	8.846
役割状況									
食事の準備	頼る	51(92.7)	93(93.0)	155	0.004	n.s	13(23.6)	12(11.2)	162
	頼らない	4(7.3)	7(7.0)				42(76.4)	95(88.8)	
掃除	頼る	48(87.3)	85(85.0)	155	0.15	n.s	12(21.8)	14(13.1)	162
	頼らない	7(12.7)	15(15.0)				43(78.2)	93(86.9)	
洗濯	頼る	48(87.3)	95(96.0)	154	4.023	n.s	7(12.7)	10(9.3)	162
	頼らない	7(12.7)	4(4.0)				48(87.3)	97(90.7)	
印鑑・通帳管理	頼る	34(61.8)	51(51.0)	155	1.677	n.s	19(35.2)	17(15.9)	161
	頼らない	21(38.2)	49(49.0)				35(64.8)	90(84.1)	
家の修理・修繕	頼る	23(41.8)	27(27.0)	155	3.566	n.s	45(83.3)	75(70.1)	161
	頼らない	32(58.2)	73(73.0)				9(16.7)	32(29.9)	
物事の意味決定	頼る	26(47.3)	40(40.0)	155	0.768	n.s	34(63.0)	54(51.4)	159
	頼らない	29(52.7)	60(60.0)				20(37.0)	51(48.6)	
精神的頼り状況	頼る	48(92.3)	80(80.8)	151	3.492	*	46(90.2)	74(71.8)	154
	頼らない	4(7.7)	19(19.2)				5(9.8)	29(28.2)	
人間関係									
近所との付き合い	ない	14(25.5)	7(7.0)	155	10.318	**	8(14.8)	11(10.3)	161
	ある	41(74.5)	93(93.0)				46(85.2)	96(89.7)	
友人との付き合い	ない	12(21.8)	8(8.1)	154	5.905	*	9(16.7)	6(5.6)	161
	ある	43(78.2)	91(91.9)				45(83.3)	101(94.4)	

* $p<0.05$, ** $P<0.01$

V. 考察

1. 対象の特性

本研究対象者は老人クラブに所属している高齢者であり、健康状態がよい人が265名(79.3%)の集団で、比較的健康状態がよかったと考える。年齢構成は、前期高齢者149名(44.6%)、後期高齢者168名(50.3%)(A県の前期高齢者/後期高齢者50.0%)¹⁰⁾であり、5.1%の不明がいるものの、A県の高齢者割合とほぼ同じであった。男女の割合については、不明が5.1%いるものの、男性155名(46.4%)、女性162名(48.5%)であり、男女比はほぼ同じ割合であった。家族構成においては、一人暮らし38名(11.4%)、夫婦のみ世帯163名(48.8%)であり、A県(単独世帯23.1%、夫婦のみ世帯29.4%)¹¹⁾と比べ、単独世帯は少なく、夫婦のみの世帯が多い集団であった。

2. 性別にみた生活への自信との関係

1) 属性との関係

年齢を前期高齢者と後期高齢者の2群に分け、生活への自信との関係を χ^2 検定で確認したが、違いはみられなかった。後期高齢者の方が体力の低下とともに、生活への自信がない方が多いと予測していたが、違いがなかったことを考えると、生活への自信には、年齢には影響がないことが明らかとなった。また、家族構成では、一人暮らし・夫婦のみ世帯と2世帯以上との生活への自信の違いをみたが、違いはみられなかった。配偶者の死別後のサポートについて澤田らが、家族と同居していてもサポートの必要であること¹²⁾を報告しているが、このことは、生活への自信に、家族との同居の有無による違いがなかったことと一致する。配偶者の死後の生活への自信をもってもらう為の介入は、年齢・家族構成を問わず、全ての高齢者を対象とする必要性が示唆された。

生活への自信と健康状態の関係は、男女ともに健康状態のよい人は、生活への自信がある人の割合が高いという結果であった。寺崎・中村は、健康状態は配偶者喪失による高齢者の悲嘆や回復に影響する要因の一つになっていることを報告¹³⁾していることから、健康を保持することは重要であり、生活への自信につながることが明らかとなった。

2) 役割状況との関係

生活への自信と役割状況との関係では、男性は、

全ての項目において生活への自信に違いがなかったが、女性では、印鑑・通帳管理を頼っていない人は、生活への自信の割合が高い結果であった。

食事の準備や掃除、洗濯といったIADL動作は、生活する上でかかせない項目であり、普段から配偶者がいない場合でも自分自身で行っていることが推察され、生活への自信に違いがなかったものと考えられる。また、食事の準備に関しては、食事が作れなくても、惣菜や弁当を調達できれば生活には困らない時代であることも一要因であると推察される。しかし、健康面を考えると、食事は栄養面を考慮して摂取することが望ましいと考えるが、本調査は、食事の準備への役割項目での結果であるため、食事内容の精選については不明である。今回は、生活するうえでの必要最低条件項目の調査であったため、食事の質を考えていくことは、今後の課題である。

また、我が国では、「夫は外で働き、妻は家で家事・育児に専念するのがよい」とする、性別役割分業意識が高い世代であるにも関わらず、男性における生活への自信に違いがなかったことは、古来からの考え方としての性別役割分業意識に変化が起きていることが推察される。女性の就労と性別役割分業社会は、昭和60年に男女雇用機会均等法の成立とともに、男女で家庭責任を遂行していく方向性に向かったとされている¹⁴⁾。長年、性別役割としての家事は女性が行うという考えの中で生活をしてきた高齢者においても、定年退職後の家庭内の家事等に関しては、性別分業ではなく、家庭内の役割としての考えに変化していると推察する。また、今回は、健康な高齢者を対象とした調査であり、他者へ依存することが少なかったのではないかと推察されるが、今後も性別というよりは、それぞれの担う役割をみていく必要があるのではないかと考える。

また、印鑑・通帳管理では、印鑑・通帳管理を頼っている人数が女性36人に対して男性は85人と多いにも関わらず、女性の方に生活への自信に違いがみられた。女性に印鑑・通帳管理を頼っている人が少ないことは、前述した「妻は家で家事・育児に専念するのがよい」という考えにより、家計をやりくりしている人が女性に多いのではないかと推察され、そのため、頼っている人が少なく生活への自信に違いがあったと考える。

3) 精神的頼り状況との関係

精神的頼り状況では、男女ともに、生活への自信

がない人は、精神的に頼っている人の割合が高かった。生活への自信に違いがあったことは、夫婦という絆で結ばれた運命共同体としてのお互いの無意識な存在が関係していると推察する。健康な高齢者における夫婦の関係について、福武らは、健康な高齢者は、配偶者を心のよりどころにしていると語っていると報告している⁶⁾。夫婦としてお互いに支えあって生きてきた高齢者にとって、精神的に頼るといった目に見えないがゆえに、普段意識できない事柄が生活への自信に影響していることを考えると、当然の結果として精神面へのサポートは重要であるといえよう。そのため、配偶者に頼っていた所を他の人が担うためには、配偶者以外に相談できる友人等の存在が必要である。相談できる存在がないと感じている場合には、社会的繋がりを持てるような支援が必要であると考ええる。

4) 人間関係との関係

人間関係において、生活への自信に違いがあったのは、男性においては、近所との付き合いと友人との付き合いであり、女性では、友人との付き合いのみであった。

近所との付き合いにおいて男性では違いがあり、女性では違いがなかったことについては、男女の違いとして、女性は男性に比べて他者や社会への志向性が高い¹⁵⁾という報告と一致しており、男性の方が他者との関係性の構築において支援が必要であるといえよう。また、友人との付き合いにおいては、男女ともに生活への自信がある人は、友人との付き合いがある人であるという結果となったが、福武らは、配偶者死別後の悲嘆からの回復促進には、人の存在が大切であると報告⁷⁾していることと一致しており、生活への自信を持つためには、日頃から友人や近所との関係を作っておく必要があるといえよう。

3. 研究の限界と準備教育への示唆

今回の調査は、健康な高齢者を対象としているため、配偶者を喪失したことを想定しての回答であり、実際に亡くなった方への調査でないことは、今回の結果が推察の域をでず、研究の限界であると言える。また、今回の調査は、老人クラブに所属する高齢者への調査であり、活動的な高齢者であることが推察され、老人クラブに所属しない高齢者を対象として調査をすることも視野にいれる必要がある。しかし、A県の高齢者をランダムにサンプリングし

調査をすることは難しく、限界があると考ええる。

今後、高齢者における配偶者の死に備えての準備教育を進めるにあたり、今回の調査で配偶者への役割状況と生活への自信に違いがあったことは、夫婦でお互いに普段の役割状況を認識し、生前からお互いが担っている事柄を実践しておくことが配偶者の死に備えての準備につながると考えられる。また、男女で生活への自信に違いがあったことを考慮するならば、性別を考慮した準備を考えていく必要があるといえよう。

VI. 結論

生活への自信がある人は、男女ともに健康状態がよい人、精神面で頼っていない人、友人との付き合いがある人であった。男性のみに生活への自信があったのは、近所との付き合いがある人であった。また、女性では、印鑑・通帳管理で頼っていない人であった。生活への自信を得る為には、健康状態を維持し、夫婦でお互いに普段の役割状況を認識し、生前からお互いが担っている事柄を実践しておくことや人間関係を構築していくことが必要であるとの示唆を得た。

【文献】

- 1) 総務省統計局 (2016). 日本統計年鑑 2017. (年齢階級、配偶関係別 15 歳以上人口、pp61. 日本統計協会 毎日新聞出版株式会社).
- 2) 内閣府:平成 28 年版高齢社会白書 一高齢者の家族と世帯.
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/sl_2_1.html (2017 年 6 月 14 日).
- 3) 竹中星郎 (2004). 老年期の喪失体験. (竹中星郎、星薫. 老年期の心理と病理、pp47-52、放送大学教育振興会).
- 4) 清水妙子 (2001). 老年期に向けての主体的準備活動. 佛教大学大学院紀要 29:115-128.
- 5) 石井京子、上原ます子 (2003). 高齢者の死の準備状態に関する研究 5 年間の経時的変化から. ヒューマン・ケア研究、3 (4): 1-10.
- 6) 福武まゆみ、岡田初恵、太湯好子 (2013). 高齢者夫婦の死に対する意識と準備状況に関する研究. 川崎医療福祉学会誌、22 (2): 174-184.
- 7) 福武まゆみ、島村美砂子、難波峰子、山本直

- 美 (2014). 高齢者における配偶者の死に備えての準備～夫を喪失した高齢者のインタビューを通して～. インターナショナル Nursing Care Research、3 (1) : 31-40.
- 8) 白波瀬佐和子 (2000). 家庭内性別役割分業と社会的支援への期待に関する一考察. 季刊社会保障研究、36 (2) :256-268.
- 9) 笹川あゆみ、池松玲子、小関孝子、北原零未 (2015). 夫婦間の性別役割分業はなぜ変わらないのか ―既婚女性へのインタビュー調査から探る―. アジア女性研究 24 : 1-12.
- 10) 岡山県：高齢者人口
http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/424208_2730444_misc.pdf(2017年1月27日).
- 11) 岡山県：65歳以上親族のいる家族類型別一般世帯数及び割合 [http://www. pref. okayama. jp/page/266533. html](http://www.pref.okayama.jp/page/266533.html) (2017年1月27日).
- 12) 澤田愛子、塚本尚子、中村美奈子他 (1998). 高齢者における配偶者死別後の悲嘆過程 農村社会での調査結果を踏まえて. 富山医科薬科大学看護学会誌、1 : 9-21.
- 13) 寺崎明美、中村健一 (1993). 配偶者喪失による高齢者の悲嘆とそれを左右する要因. 日本公衆衛生雑誌、45 (6) :512-525.
- 14) 岡村清子 (1990). 主婦の就労と性別役割分業 ―女性の職場進出は家族の役割構造を変えるか―. 家族社会学、2:24-35.
- 15) 坂田桐子 (2014). 選好や行動の男女差はどのようにに生じるか ―性別職域分離を説明する社会心理学の視点―. 日本労働研究雑誌、648:94-104.

Adaptation to Life after Bereavement of a Spouse ～ The relationship of confidence in life and roles viewed from a gender perspective ～

MAYUMI FUKUTAKE*, MISAOKO SHIMAMURA*, MINEKO NAMBA,
TETSUYA OGINO***

**Graduate School of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University. 111 Kuboki, Soja, Okayama, 719-1197, Japan*

***Kansai University of Social Welfare. 380-3 Nitta, Ako city, Hyogo, 678-0255, Japan*

Abstract The purpose of this research is to clarify gender-specific factors influencing confidence in life after bereavement of a spouse and find implications for specific preparations to increase said confidence. We distributed a self-reporting questionnaire to 600 members of an elderly persons' group in Prefecture A consisting of basic attributes, state of roles in daily life, state of emotional dependence, human relationships, and confidence in life after the loss of a spouse. We collected 401 responses and analyzed 334 of them, excluding those respondents who did not answer any of the items relating to the state of roles and confidence in life after losing a spouse before implementing an χ^2 test by gender regarding their confidence in life or lack thereof as well as other items. The items relating to confidence after the loss of a spouse were state of health, emotional dependence, and relationships with friends for both sexes, with relationships with neighbors for men only and management of seals and bankbooks for women only. The results obtained suggested that acquiring confidence in life requires maintenance of health, recognition of ordinary roles as spouses, and putting these into practice while the spouse is still alive as well as creating human relationships going forward are all necessary.

Keywords : gender, elderly person, spouse, confidence in life, role